

最優秀作品賞

「夫の健診が気づかせてくれたこと」

大橋 里香さん

平成27年の12月、年の瀬も押し迫った頃だった。夫宛に1通の手紙が届いた。会社指定の病院で受けた健康診断の結果のようであった。親展の文字に勝手に開封することを少しためらったが、やはりどうしても気になり封を切ってみた。文書を見た瞬間、「肺に腫瘍影有り、要精密検査」の文字が目飛び込んできた。まさか夫は肺がんなのか。たちまち頭の中が真っ白になった。

今から6年前、私は乳がんを患った。きっかけは健康管理のためにと、市で行われた乳がん検診を受診したことだった。約1ヵ月後、「右胸にしこり有り。要精密検査」との通知が届いた。この時点ではしこりイコール乳がんとは思ってもいなかったし、思いたくもなかった。けれど当たり前かもしれないが、夫はたいへん心配した。少しでも早いほうがいいからと、翌日勤めを休んで、混乱している私を促して近隣の総合病院に連れて行ってくれた。こちらで詳しい検査を受け、翌週検査結果を聞くために再度病院を訪れた。

がんの告知を受けた時のことは今でも忘れられない。衝撃のあまり、足元の床が抜け落ちたかのような感覚に襲われた。しかし、本当に大変だったのはこの後からであった。医師と相談した結果、手術は専門の病院の方が良いということになり、愛知県にあるがんの専門病院で受けることになった。手術の打ち合わせや検査のために、片道約3時間の病院まで夫とともに何度も足を運んだ。無事に摘出手術を済ませた後は抗がん剤による治療、さらにその後は胸の再建手術と、約1年ほどかなり慌ただしい日々が続いた。肉体的な辛さはかつて経験したことがなかったほどであった。その間夫は、愚痴ひとつこぼさず、育児に家事に仕事にと何もかも1人でこなした。私の通院にも必ず付き添ってくれた。そして私の心にも常に寄り添い続けた。治療の厳しさに精神的にも参りがちだった私がなんとか乗り越えられたのは、夫が全力で支えてくれたからに他ならない。最初はどうなることかと途方にくれたが、治療も一段落がつき、1年、2年と経つうちに体も心も少しずつ回復し、落ち着いた日常が戻ってきた。

そんな矢先、夫宛てのショッキングな検査結果通知が届いたのである。私も驚いたが、夫本人はもっと驚いたはずである。だが彼は、取り乱すこともなく、気丈に振る舞った。対して私はというと、自分のことだけでもいっばいいいばいなのに、夫までがんになったらどうしたらいいのだろうか。まさか夫婦で闘病生活を送るのかと、どんどん悲観的になっていった。不安が高じて、しまいには夫本人に八つ当たりをするという身勝手ぶりであった。再検査の日には私も付き添った。付き添いという聞こえは良いのだが、心配でいてもたってもいられなかったというのが正直なところである。その日受けたCT検査の結果、夫の肺は全く異常なし、どこも悪い箇所はないと証明された。そのことを聞いた瞬間、医師の前でなかったら夫に抱きついて喜びたいくらいだった。そして、ようやく私の心にも彼のことを思いやる余裕が生まれた。それまでの私には、がんになった妻を持つ夫の心情を慮るゆとりなど全くといっていいほどなかったように思う。がんになった本人、すなわち私自身がいちばん辛いのだと思こんでいた。でも、家族も同じくらいに辛いのだ、いや場合によっては患者本人よりも辛い時があるのかもしれないと気づいた。本人は辛い時には辛い、痛い時には痛いと言える。けれど、家族のほうはなかなか気持ちを吐き出すことができないのではないだろうか。「患者の家族は第2の患者」という言葉を聞いたことがある。夫の健診にまつわる一連の出来事から、ようやく患者の家族の心の痛みに思い至ることができた。そうして、今さらながらに健康であることのありがたみを痛感したのである。

夫は肺がんではなかった。しかし彼は、この時の健診を機に約30年間吸い続けたタバコをやめることを決意した。以来、ただの一度もタバコに火をつけてはいない。